

水道水ヲ溶解液トセル「ネオサルワ`ルサン」濃厚液注射

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38174

原著及實驗

●水道水ヲ溶解液トセル「ネオサル
ブルサン」濃厚液注射

臺北醫院皮膚科 池 上 豊(學堂卒業)

一九〇九年エーレルリッヒ秦氏ノ「サルブルサン」發見サレシ當時ハ中性乳液トシテ皮下注射行ハレタリシモ其ノ吸收ノ不充分且ツ疼痛ノ劇烈甚シキニ至リテハ局部ノ環坦ヲ起ス等ノ点ヨリ靜脈内注入賞用サレタリ然レハ溶解ノ困難中性トナスノ不便其ノ操作ノ簡易ナラザルヨリエーレルリッヒ氏ハ號ヲ加フル「三〇八即九一四號」ネオサルブルサン」ヲ改造サレタリ而シテ近時ハ夫ノ特性トスル中性且ツ迅速ニ易ク水ニ溶解スルヲ利用シ濃厚液注射ノ便利ニシテ簡易ナルヨリ一般ニ應用ヲ見ルニ至レリ。然レハ「サルブルサン」注射後ニ最も多ク見ル熱候ニ對シテハ其ノ原因ヲナスハ溶解液中ニ含有スル雜菌ノ屍蛋白ニアル「トナツエ」グセルマン氏唱道セシ以來ハ其ノ溶解液ニ最も注意ヲ拂ヒ可能的新鮮ナル食鹽水又ハ蒸餾水ヲ選擇スベシトセ

リ、是レ民間實地醫家ニ向フテハ割合ニ困難ナル要求ニシテ尙此ノ注射後「サルブルサン」熱ニ對シテハ渡邊、弘岡兩氏ノ報告、本村氏ノ本研究室ヨリノ實驗報告其他諸氏ノ全様ナル報告ニヨリテエーレルリッヒ氏ノ水禍説モ絶對ノ價值ヲ有セザルニ至リ加フルニ近時用キラル、濃厚液注射ニ對シテハ大量ノ溶解液ヲ要セザルガ故ニ一層多クノ價值ヲ拂フニ足ラザルナリ。

從來新鮮ナル食鹽水ノ外ニ「サルブルサン」溶解液ヲ用キシ例ニ乏トハセズ筒井氏ノ普通蒸餾水(皮膚科及雜誌十二ノ二)渡邊、弘岡兩氏ノ貯藏蒸餾水及ビ煮沸水道水(全誌十二ノ八)、光野氏ノ陳舊蒸餾水(全誌十四ノ四)等ノ報告近時ノ濃厚液ノ溶解液トシテ宗氏ノ自家血清(全誌十四ノ六)ノ應用アリ、而シテ渡邊、弘岡兩氏ノ使用セラレタル東京水道水ハ之レヲ〇、六%ノ食鹽水トシテ大量ヲ應用セラレタリ。

予ノ使用シタル臺北水道水ハ食鹽水トセズシテ單水ノ儘少量ヲ試用シ何程ノ副作用ヲ來タスカチ事實的ニ証明シ且ツ新鮮ナル食鹽水ヲ應用シタルトキト差異ヲ認メザルヲ確メタレバ茲ニ其ノ成績ヲ報告セントスルモ予某ヨリ溶解液トシテハ水道水ヨリモ寧ろ新鮮ナル食鹽水又ハ蒸餾水ヲ推奨スルハ勿論ナレハ該報告タルヤ實地家ノ參考タラバ幸甚ナリ。

動物試驗

予ガ應用セントスル十二%ノ「ネオサルブルサン」水道水溶液及ビ注射ニ要

スル水道水ノ量、五、〇c.c.ガ如何ナル變化ヲ及ボスカチ究メンガ爲メニ正ノ家兔ヲ選ビタリ。

第一號 體重 一一九、〇〇瓦 體溫(一日平均) 三八度四分

十二%「ネオサルグルサン」水道水溶液一、〇c.c.、「ネオサルグルサン」〇、一二(含有ス)ヲ耳靜脈ニ注射ス、注射後約三時間ニシテ體溫ノ上昇ヲ始メ六時間ニシテ最高ニ達シ四一度三分ヲ示セリ他ニ何等ノ反應ヲ呈セズ翌朝半温ニ復セリ注射後四日ニシテ體重ハ増シ一二五、〇〇瓦(六五、〇瓦増量)トナレリ。

第一回注射後六日目に第二回注射チ前ト全量ヲ股靜脈ヨリ行ヒタルモ發熱ヲ來サズ且ツ數日ニ尿中ニ異常成分ヲ証明スル與ハザリキ、四日ヲ經テ斷頭シ諸臟器殊ニ心臟腎臟ヲ檢スルモ解剖的變化ヲ認メズ

第二號 體重 一三三、〇〇瓦 體溫 三八度六分

「ネオサルグルサン」水道水五、〇c.c.、「ネオサルグルサン」ノ含量〇、一(五)ヲ耳靜脈ヨリ注入ス注射後約二時間ニシテ體溫上昇シ六時間ニシテ最高四二度二分ニ達シタレモ十時間後ハ下降シタリ注射後六日目に體重一四五、〇〇瓦(一二五、〇〇瓦増量)ニ増シタリ。

第一回注射後六日目に第二回注射チ前ト全量ニ股靜脈ヨリ行ヒタルモ熱發其他何等ノ反應ヲ見ズ尿中蛋白ハ常ニ証明セズ注射後六日撲殺シテ諸内臟器ノ檢スルモ異常ヲ呈セズ。

以上第一號ニテ十二%ノ溶液、第二號ニテ注射量五、〇c.c.ガ靜脈内注射ニ於テ危險ナキチ知リタレバ予ハ是レチ下ノ方法ニヨリ一般微毒患者ニ應用シタリ。

注射ノ用意及ビ方法

注射ノ用意トシテ水道水ハ水道ノ支脈ニ貯溜スル水量ヲ按檢ニヨリ放棄シタル後ノモノヲトリ更ニ濾過シテ「コルベン」内ニ收メ約二時間餘リ煮沸シ室温ニ至ルヲ待チテ用ニ供セリ(急テ要スルハ冷却セリ)今滅菌シヤーレー「中」ニ「ネオサルグルサン」〇、六(患者ノ體溫ニヨリ量ニ變化スルハ勿論ナリ)チナルベク廣ク薄ク皿底ニ移シ後水道水五、〇c.c.チ加フレバ數秒ニシテ溶解ス之ヲ消毒シタル五瓦注射器ニ吸引シ肘窩靜脈(小兒ニテハ手背足内側ノ靜脈)ニ極メテ徐々ニ注入シタリ尙予ハ注入後ニ濃厚液ナルガ爲メニ万一ノ血塞形成ヲ豫防センガ爲メ每常全注射器ノ注射後靜脈内ヨリ拔去セズシテ其儘更ニ靜脈血ヲ吸引シ夫レチ以テ靜脈壁ヲ速力ニ洗フチ例トセリ。

注射ノ間歇ハ六日又ハ七日ニ一回トセリ、

副 作 用

以上ノ方法ニ依リ注射チ行ヒタルモノ四十二例其ノ注射回数九十三回ニシテ今左ニ副作用及ビ診斷チ示サン。

姓名	年齢	診 斷	注射一回ノ回数	發熱	頭痛	嘔吐	下痢	其他
辻	二	初期硬結	二	〇、六	三、七	+	+	嘔氣食慾不進
荒木	元	咽頭口蓋	二	〇、六	+	+	+	嘔氣全身倦怠
佐藤善	三	咽頭微毒	三	〇、六	+	+	+	
佐藤辰	三	咽頭微毒	三	〇、六	+	+	+	
江永	四	咽頭微毒	四	〇、六	+	+	+	惡寒
友廣	六	潜伏微毒(常習流産)	二	〇、六	+	+	+	惡寒便秘食慾不振

日高	三	骨髄膜腫	二〇七五		
進藤	三	初期硬結 丘疹微毒	一〇六六	+	食氣不振
清水	四	咽頭微毒	〇〇六		
寺田	四	丘疹微毒	一〇七七八	+	藥臭
白鳥	三	薺微丘疹 微毒	四〇六四二	+	藥臭 嘔氣心悸
黃仁	一	潜伏微毒	〇〇四〇三	+	心悸亢進
中松	四	潜伏微毒	一〇六六		
清川	三	潜伏微毒	三〇六六三	+	
新川	三	丘疹微毒	二〇六六四	+	惡寒
池畑	三	骨髄膜腫	二〇七五		
櫻野	三	潜伏微毒	二〇六六	+	全身倦怠
田中	四	潜伏微毒	四〇六六		發汗
櫻井	三	肝臟微毒	四〇六六		
林榮	三	骨髄膜腫	三〇六六		
工藤	三	潜伏微毒	二〇六六		
小林	三	潜伏微毒	一〇四五六		嘔氣食氣不振
黃運	三	丘疹微毒 數毒性禿頭	二〇六六八	+	
加藤	三	潜伏微毒 (常習流産)	二〇六六		嘔氣全身倦怠
土居	三	潜伏微毒	三〇六六		
林泰	三	潜伏微毒	一〇六六五	+	
遠島	三	咽頭微毒	三〇六六		眩暈戰慄
池田	三	薺微丘疹 微毒	二〇六六		心悸亢進

張秋	三	丘疹微毒 微毒性禿頭	二〇六六三		食慾不振
平松	三	及ビ乾癬 微毒	三〇六六		
周綿	三	潜伏微毒	三〇六六		
余強	四	遺傳微毒	一〇三三四	+	
余綱	七	遺傳微毒	一〇二五	+	
張勤	元	潜伏微毒	二〇六六		
鐘建	元	斑紋癩	二〇四二	+	皮疹發汗
林墻	三	膜腫	二〇六六		
張犬	三	潜伏微毒	一〇六六		
吳永	三	遺傳微毒	一〇一五	+	
吉田寅	三	初期硬結	二〇六六八	+	藥臭惡寒心悸
林靈	三	潜伏微毒	一〇六六		
草野	三	神經癩	一〇四二	+	嘔氣
吉田	三	潜伏微毒 (常習流産)	一〇六三七		嘔氣戰慄
平田	三	斑紋癩	二〇六六	+	

註、鐘建(斑紋癩)ハ全日「ツベルクリン」ノ注射モ併用セシ爲メ發熱ハ何レニ因スルカ斷定シ難シ。

熱候ハ第一期微毒第二期微毒、潜伏微毒トイフ經過順ニ新鮮ナルモノニ高ク漸次減少シ第三期微毒ニテハ殆ド毎當發熱セザリキ且ツ第一回注射ニ多ク回チ重ヌルニ從ヒテ減少スルハ諸家ノ成績ト一致セリ。

頭痛、惡寒、嘔氣、眩暈、食慾不振、全身倦怠等ノ副作用ハ全々發熱ナキ患者ニモ起リ得レト一般ニ熱候ニ伴ヒ且ツ高熱ノモノニ多キヲ見タリ

藥臭、嘔心、戰慄、心悸亢進ノ如キハ神經質ノ人又ハ婦人ニ多ク余ノ經驗セル甚シキニ例ノ如キハ注射時ニ藥臭ヲ訴ヘ嘔氣ヲ催シ注射後數分ニシテ嘔吐ヲナシ心悸亢進ヲ認其メノ注射前ニハ共ニ甚シキ恐怖心ヲ有シ居タリ尿中蛋白及ビヘルグスハイマー氏反應ハ一例モナカリキ

効力

水道水ヲ溶液トシテ用キタル余ノ例ニ於テハ新鮮ナル食鹽水ヲ用キタルトキト其ノ効力ニ於テ大差ナキヲ知リタリ、今其ノ効力ヲ總括センニ、初期硬結ハ注射後三、四日ニシテ潰瘍ハ全治シ滲潤ハ度ヲ減ズルモ全ク縮小スルニハ第四回ノ注射ノ了ル頃ナリキ、

第二期微毒ニテハ最モ奏効著シク蓄微疹ハ一日又ハ二日ニシテ消失シ、丘疹ハ四日後ニ褐色隆起ハ去ルモ色素沈着ハ割合ニ永ク存在ス、手掌足蹠ノ乾癬ハ四日乃至六日ニシテ落屑シ結痂疹ハ注射翌日より乾燥シ數日ヲ出テズシテ治シ咽喉痛、關節痛ハ共ニ翌日放散シ禿頭ハ第四回注射ノ頃ニハ脫毛止ミタリ、

第三期微毒護膜腫ハ破壊シタルモノハ著シク効果ヲ顯ハシ注射翌日ニ潰瘍ハ清潔トナリ良性肉芽ヲ現ハシ約四週間餘リニシテ殆ド癩痕形成ヲ見タリサレド破壊セザル護膜腫ノ數例ニ於テハ其ノ吸收ハ顯著ナラズ要スルニ例少ナキタメ一定スル與ハズ、

尙病床日記ヲ記載シ其ノ効力ヲ示サン

第一例 櫻井某 男 三十二年

(既往症) 生來健全ニシテ著患ヲ知ラズ二十七歳ニ淋疾ニ犯サルモ醫治セリト舉子二人共ニ生後間モナク逝去ス患者ハ嘗テ發疹脫毛嘶聲等ヲ覺ヘズ

ト

(發病歴) 昨年七月全身ニ黃胆ヲ呈シ某醫ニヨリ加答兒性黃胆ノ病名ノモトニ加療シ數ヶ月ニシテ去レリ然レモ本年一月ニ再發ヲ見前ト全様ノ診斷ノモトニ入院ヲ命セラレ治療ヲ受クモ全ク消失スルナクシテ微毒ノ疑ヲ以テ本科ニ送ラレタリ、

(現在症) 大正三年七月初診

體格中等榮養稍不良皮膚一般ニ黃胆ヲ呈シ殊ニ眼珠結膜著シ肝臟ノ濁音界ハ擴ガリ容易ニ觸知スルヲ得テ輕度ノ壓痛ヲ有ス頸腺及ビ鼠蹊腺ノ數箇増大シ頭毛素引ニテ易ク脫スリツセルマン氏反應強陽性

(診斷) 肝臟微毒

(治療) 七月八日第一回「ネオサルブルサン」〇、六ナ前記載ノ方法ニヨリ靜脈内ニ注射ス何等ノ反應ナクシテ翌日黃胆ハ洗フガ如クニ全ク去リ肝臟ノ増大モ著シク縮少シ觸知スルヲ得ズ

第二、第三、第四回共ニ何等ノ副作用ナク脫毛モ第三回注射後全ク止ミ食欲モ亢進スルニ至レリ、

第二例 白鳥某 男 三十一年

(既往症) 生來健全ニシテ幼時麻疹ヲ經過ス五六年前ニ淋疾ニ感染ス(發病歴) 一夜遊女ニ戯ムレ四、五日後ニ外尿道孔ニ一箇ノ潰瘍ヲ生シ膿汁分泌物ヲ漏ラシ排尿時疼痛ヲ有シ爲メニ某醫ニ診テ乞ヒ甘草末ノ撒布ト沃度加里ノ内服ヲ處方セラレタリ後數日ニシテ患者ハアル事情ノ爲メ内地ニ歸ルノ止ムナキニ至リ溫泉ニテ保養ヲトリタリト、後一ヶ月ニシテ陰部ノ潰瘍ハ快スルト共ニ全身ニ多數ノ赤色小發疹ヲ生ジタリ癢痒疼痛ナカリ

キ、全時ニ咽喉痛甚シク充分食物ヲ嚙下スル與ハズ依テ再渡臺ノ上治療ヲ受クベク本院ニ來タレリ

(現在症) 大正三年七月二日初診

體格榮養共ニ良、胸腹部諸臟器ニハ異常ヲ認メズ

外尿道孔ハ符合セズシテ漏斗狀ニ凹陷シ小指頭大ノ硬結ヲ觸レ一部尙潰瘍ヲ呈シ繫帶ハ爲メニ欠損シ尿線四方ニ放散ス、顔面軀幹四肢ニ數多ノ銅赤色ノ硬キ扁豆大ノ丘疹及ビ頸腹部大腿ニ蕃微疹ヲ見ル、手掌ニ微毒性乾癬ヲ有シ毛髮ハ脫シ微毒性禿頭ヲ呈セリ咽喉ハ發赤腫脹スレハ潰瘍ヲ見ズ頸肘鼠蹊腺ハ共ニ腫起ス

(診斷) 第二期微毒兼初期硬結

(治療) 全日前法ニ則リ第一回「ネオサルブルサン」〇、六注射ス注射時嘔心藥臭ヲ訴ヘ數分ニシテ二回ノ嘔吐アリ數時ニシテ發熱シ四十度二分ニ高昇ス

翌日咽喉痛ハ全ク去リ自在ニ食物ヲ嚙下スルヲ得タリ全日楊朮ノ腎筋内注射ヲ併用ス注射後第二日ニシテ蕃微疹ハ痕跡ヲ殘サズ第四日ニシテ丘疹ハ全ク色素沈着ヲ止メテ消失シ尿道孔潰瘍ハ治シ手掌乾癬脱落セリ

第二、第三、第四回目ノ注射ハ何等ノ副作用ナク脫毛モ第三回目後ニハ全ク止ミ患者ハ非常ナル感謝ノモトニ今尙楊朮注射ヲ續行シ居レリ、

第三例 池田某 男 三十三年

(既往症) 生來健全ニシテ著患ヲ覺ヘズ

(發病歴) 本年四月中旬一友ト花柳ノ巷ニ遊ビ拾日後ニ陰莖ニ一個ノ大豆大ノ硬結アル潰瘍ヲ認メタルバ即刻某醫ニ診療ヲ乞ヒテ潰瘍ハ治シタレハ

硬結ハ以前ヨリ大キク全時ニ左鼠蹊腺ニ腫脹發赤ヲ來タシタルバ切開ヲ受ケテ治シタリ後一ヶ月餘ニシテ前切開部近傍ニ腺ノ腫脹ヲ來タシタルモ放置シテ自然ニ消失シタリ後右肘關節及ビ左膝關節ニ疼痛ヲ覺ヘ殊ニ夜間ニ著シク安眠ヲ妨ゲ且ツ伸縮自由ナラズ某醫ノ診療ヲ受クモ快セズ依テ本院ニ來タレリト

(現在症) 大正三年七月七日初診

陰莖ノ冠狀溝ニ扁豆大ノ瘰癧形成ヲ見ル底ニハ少シク浸潤存ス、胸腹部頸部ニ蕃微疹及ビ丘疹數多アリ頭部顔面ニハ多數ノ痲皮アル小結節疹ヲ見、滲潤強シ頭毛ハ索引ニテ著シク脫ス肘腺鼠蹊腺頸腺ハ共ニ腫起シ關節ハ他覺的ニ障害ヲ認メズモ運動時ニハ輕痛ヲ訴フ

(診斷) 第二期微毒

(治療) 七月十三日入院ノモトニ第一回「ネオサルブルサン」注射ヲ行フ前例ノ如シ何等ノ副作用ヲ見ズ

翌日關節痛全ク去リ運動自在ニ安眠スルヲ得タリ全日ヨリ楊朮注射併用ス注射後第二日ニシテ蕃微疹ハ去リ第三日ニシテ丘疹消失シ頭部ノ結痲疹ハ痲皮ヲ脫シタリ一週間後ニ第二回注射ヲ行ヒ脫毛モ止ミタリ

臺北水道水

予ガ使用セシ臺北水道水ハ沈澄池ト市内栓トニヨリ其ノ水質ニ差アルハ勿論ナレバ予ハ後者ヲ使用シタリ、此ノ市内栓ニテモ各月ニテ又其ノ成績ヲ異ニスレバ今各月ノ平均數ヲ既ニ公示セラレタル總督府研究所ノ大正元年度調査ヲ拔萃セン

一、色 度 無色 一、濁 度 澄明

一、臭 味 無味無臭 一、反 應 弱アルカリ性

一、格魯兒 四〇一〇 一、硫 酸 痕跡

一、亞 硝 酸 痕跡 一、安母尼母 檢出セズ

一、固形物總量 七、八四〇 一、硬 度 一、一〇五

一、細菌聚落數 一五 一、過滿儉酸加里消費量 〇、五八七

註 1 表中含有物ノ量ハ檢水「リール」中ニ含有スル「ミリグラム」量

ヲ示ス、

2 硬度ハ獨逸法ニヨル、

3 過滿儉酸加里消費量ハ檢水「リール」中ニ含有スル有機物ノ酸

化ニ要スル過滿儉酸加里ノ「ミリグラム」量ナリ、

4 細菌聚落數ハ檢水「立方」センチメートル」中ノ細菌數ヲ示ス、

結 論

一、「ネオサルブルサン」濃厚液靜脈内注射ニ溶解液トシテ水道水ヲ用キル
モ新鮮ナル食鹽水ヲ以テシタル片ニ比シ其ノ副作用及ビ効力ニ差異ナシ
一、蒸餾水又ハ食鹽水ノ準備ヲ要セズ應用ニ簡易ニシテ且ツ便利ナリ、

●「サルバルサン」ト眼梅毒ニ就テ

ドクトル

辻本辰之助 (三十五年卒業)

私ノ演題ハ昨年一度十全會ニ提出セルモ事故ニヨリ欠席致シマシタノデ年
越ノ演題デアリマスカラ歐ガ生テ居リマシテモ何等目新シキ事柄ノナイコ

トハ前以テ御斷リ致シ置キマス、

然シ時殆モ「サルバルサン」ノ發見者ノ一人エーリヒ博士ハ今年三月十四日
カ六十才ノ誕生日ノ由デアリマスカラ此機會ニ於テ私ノ小實驗ヲ述ベ聊カ
御清聽ヲ煩スト同時ニ遙方ニ斯ノ偉人ニ敬意ヲ表シヨウト思ヒマス、

却說、「サルバルサン」ガ梅毒ニ對シテ優秀ナル治効ヲ奏スルコトハ己ニ業
ニ世人ノ普ク知ル所デアリマス、而シテ又タ其梅毒ノ種時期、病症ノ輕重、
新舊、及梅毒性疾患ノ占居スル器關ノ異ルニ從ヒ其治効ニ差異アルコト亦
已知ノ事實デアリマス、

今私ハ茲ニ眼梅毒ニ對スル治療の價値ニ付キ極メテ概觀ヲ述ベ本會講話部
委員諸君ヨリ何カ講話セヨトノ切角ノ御勸誘ニ應セル責任ヲ脱セントスル
次第デアリマス、

最始「サルバルサン」ノ發見ハ梅毒性眼病ニ對シテ其効果ヲ大ナル希望ヲ以
テ迎ラントルモ其後不結果ノ報告、又期待セララントル成蹟ヲ擧ケ能ハサル
場合アル片且數一回ノ注射克ク全治セシムルヲ得サルニ及ンテ漸ク非難ノ
聲ヲ聞クニ至レリ而シテ今ヤ本品ノ價値ニ付キ論述シ得ルノ時期ニ達セリ
依テ余ハケツチンゲン大學眼科部ニ於テ實驗セル例トヨリ聊カ是ガ
卑見ヲ述アベシ、

5 Tableハ統計ニヨリ六五%ノ良果ト三五%ノ不結果ヲ得テ曰ク「サルバル
サン」ハ眼梅毒ニ對シテハ未タ他部ノ梅毒ニ於ケルヨリモ其効果少シト
Bouvier ハ若シ吾人が「サルバルサン」ノ適量ヲ尙一層確實ニ決定スルヲ得
而シテ何回且又タ夫レヲ幾日間ノ間ケツニ施行スルヤヲ定メ得ルナレハ其
効果ヲ尙一層高メ得ルナラント曰ヒ